Title	日本におけるキリスト教教育の意義
Author(s)	大木，英夫
Citation	キリスト教と諸学 ： 論集, Volume1, 1986.12 : 60-87
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3225
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

日本におけるキリスト教教育の意義

学校法人聖学院理事長
東京神学大学教授
大　木　英　夫

聖学院ファミリーの短大という一つの交りの中にお招きを受け、そして「キリスト教教育の問題について話をする」という課題を与えられて参りましたが、今、竹野先生から、この前（一九八五年クリスマス礼拝）の話のようなわかり易い話ということですけれども、実は、短大の先生方や職員の方々にお話をするというわけで、ああいう話は学生さん向きでして、当然少し違うお話をするようになるかと思います。それではご期待に添わないのではないかという気持ちもいたします。西谷先生から、今日は、理事長というよりは、東京神学大学の教授の立場からお話をして下さいというお話を伺いましたので、実は、そういう方角からやって来た者としてキリスト教教育について、どういうことを考えているかというお話をさせていただこうと思って参りました。

これが第二回目だそうですね。昨年国際キリスト教大学の古屋先生が、この機会に見えたことは知らされておりましたが、それで、昨年はどういうお話でしたのですかと、昨日、お隣りのＩＣＵの研究室を尋ねて、古屋先生からあらまし伺って参りました。何か、それは、テープから起こされて、印刷物になる準備が整ったようですね。

古屋先生は、お話がたいへんお上手な方でありまして、非常に良い、また強い印象を皆さんにお与えになられたと思いますが、私はどうも、古屋先生のような雄弁家ではありません。お話ししたいことをはっきりお話できるかどうか心もとないのでありますが……。古屋先生も、皆さまにお話をしたことが大変に良い思い出とみえまして、皆さんによろしくと言っておられました。そしてその際に、最近新しく出来上がった、私がＩＣＵで話をしました講演がたまたま机上にありましたので、これをもらって参りました。それを皆さんにおわかちしたいと思います。今日の話に多少、最後の部分で関係あるところがありますので、ご覧いただければと思います。それから、『形成』も参考資料として、三十部ぐらいしか持って参りませんでしたが、これもお分けいたします。「日本の精神的宿題としての聖書」という論文ですが、これは哲学雑誌『理想』に書いたものをここに、もう一度転載したものであります。そのことをついでに申し上げまして、私の話に入らせていただこうと思います。

今日ここで、いわゆる教育に関する一般論を申し上げることは必要ないと思います。もちろん、こういう議論が必要であり、重要であるということは言うまでもありません。教育の目的は何であるかということを、すべて教育に携わる者がはっきり捉えていなければ、その責任を果すことができないということは言うまでもありません。そういうわけで、教育の一般論ということは重要でありますけれども、そのことに深入りいたしますと本題になかなか取り組むことができなくなりますが、少しキリスト教的観点から見てみたいと思います。

さて、教育について、キリスト教の神学も、実は深い関わりを持ってまいりました。私の恩師エーミル・ブルンナー先生は、そういう方面についても関心をもち、たいへん造詣の深い先生であられました。この人は、バルトという神学者と並んで有名になったチューリッヒ大学の学長もされた方でありますが、そのブルンナー先生の著書で翻訳もされたものとして、『キリスト教と文明』というものがあります。これは、もと国際基督教大学の教授をしておれた川

田殖先生が訳しておられますが、その書物の中に、この教育問題を取り扱ったところがありますので、キリスト教の観点から教育をどういう風に考えているかということについては、ブルンナーのこの書物をご参考にしていただくのがいいのではないかと思ってご紹介しておきましょう。

このブルンナーは、西欧、特にドイツ語圏の教育思想は、一方ではソクラテス的な考え方と、他方ではキリスト教的な考え方、その二つの流れが合わさったものが教育の基本的な考え方を作っているという、そういう見方をしております。ソクラテスの考え方は、これはご承知のように、マイユーティケーつまり「産姿術」ということばで表わされています。それは、教師というのは、子どもに何かをつぎ込むというよりは、その子どもの中にあるものを、丁度、産姿さんが赤ちゃんが生まれ出るのを助けるような仕方で、引き出す役目を果すのであります。たまたま英語のエデュケーションという言葉が、その引き出すという含蓄を持っておりますけれども、そういうことが教育であるという風に考え、だから教育の目的は、個人の自立と精神の自立をもたらすように援助することだという風に考えるわけであります。しかし、キリスト教の場合はこのソクラテス的な考え方だけではなくて、つまり人間の中にあるというものを引き出すということではなくて、何か、神から与えられているものを受け入れねばならない面があるわけですね。こうしてソクラテス的な考え方と、キリスト教的な考え方とを、近代のドイツの教育思想家たちは、結びつけようとしたわけですね。おそらくご承知と思いますが、レッシングの『人類の教育』というたいへん有名な書物は、キリスト教の思想とソクラテス的な、今、申し上げましたような考え方とを結びつけたものであり、また、ルッソーの考え方も同じ方向にあります。

このレッシングの考え方を展開したものとして、ヘルダーの教育思想――これが近代のドイツの教育思想にとりまして、中心的なものになりますが――ヘルダーは、ドイツ語で教育ということを表わすのに、ビルドゥングという言

葉を用いました。ビルドゥングというのは、建て上げるということですから、人間形成ということですね。そのビルドゥング、人間形成で、どんなことを考えていたかというと、人間性の中に内在しているあらゆる可能性を開発するというソクラテス的な考え方と、世界史の普遍的な把握というものとを結びつけようとするのですね。そういう、非常に大きな構想をもっておりました。人間の中から引き出すということと、世界史――そこには文化の、人類の作り出した文化の遺産というものがあるわけでありますが――その全体を統合的に結びつけるという、たいへん雄大な構想を打ち立てたわけであります。こういう考え方は、ドイツにおいてはゲーテとか、シラーとか、フンボルト、フィヒテ、シュライルマッハー、ヘーゲル、こういうような哲学者たちに、また文化人たちに受入れられて、共通のものとなってまいります。

このビルドゥングという考え方、これは引き出すというエデュケーションということだけではなくて、何かを形成するという考え方でありますね。こういう仕方で、教育というものを、文化形成という課題に取組む作業として拡張したわけであります。わたしたちは、教育ということに携わっている者として、教育の理念をあまりに狭く考えるということであってはならないのではないかと思うのです。このビルドゥングという考え方、今日ではこういうような考え方があまり議論されなくなってきたかも知れませんが、依然として、新しく学ぶ必要があるのではないかと思うのですね。

日本においては、教育というものが、どうも矮小化されてしまう傾向が強いと思います。それは、入学試験ということに、日本の教育は強く影響されておるようでありますから、どうも、教育が狭く考えられてしまう。そして、中、高の教育でありましても、また、短大、大学の教育でありましても、ビルドゥングという言葉で言い表わされたような教育がもっている大きな使命というものを、あまり自覚しなくなってきたのではないかと思います。この教育の理

念を、もう少し大きく捉えなくてはならないということは、単に近頃よくいわれる生涯教育という方向に広げるということだけでは充分ではないと、私は思うのです。文化形成の課題を担うようなものです。そして、教育者というものは、そういう課題に取り組んでいる働き人なんだ、という自覚がなければならないと思うわけであります。

このビルドゥングという教育理念をもって、当時のドイツは国民的な偉大なる文化建設を企てました。それは、お隣りの国の強力な支配者であったナポレオンに対して、ドイツを何とか強大な国にするという政治的目的もあったわけでありますけれども、そういう国全体の命運を懸けるような課題、これが教育だという風に考えておったわけであります。予備校教育、受験のための教育とか、あるいは単に免許証を与えるための教育というようなものに矮小化されてはならないということではないかと思うのですね。

そういう意味で、教育の考え方を拡大することによって、わたしたち教育に携わっている者は、それでは日本の文化の将来をどうするかというようなことを考える気迫をもち、そしてそれと取組むようにならなければならないのではないかと思うのであります。特に、短大以上の高等教育機関において教育の奉仕をしている者としては、そういう視野、また、そういう自覚をもっていなければならないのではないでしょうか。この新しい世界情勢の中で、日本はどういうことをしていくべきかと、あるいは、どういう風になってゆくのか、日本は何処へ行くのかというような課題を回避しないことであります。

わたしも、ご紹介にありましたように、東京神学大学の教授をいたしており、教育に携わっている者の一人でございます。今、竹野先生が、組織神学ということを言われましたが、わたしの専門の分野は組織神学というもの、神学という学問はたいへん古い学問でありましていろいろな分野に分かれておるわけでありますが、例えば、聖書神学とか、歴史神学とか、実践神学、そして組織神学とかがあって、その中にこの組織神学という分野があります。ちょっ

と理解しにくいことがあるかもしれませんが、実際の教育の現場におきましては、皆さんと共通するところが、相当あるのではないかと思います。

ところでキリスト教といいましても、十六世紀の宗教改革を経てきたいわゆるプロテスタント・キリスト教の場合は、カトリックと組織神学の教育という点でとくに違うところがあります。カトリックの大学でありますが、上智大学にも神学部がありまして、そこにはもちろん、組織神学の教授がいるわけでありますが、しかし、このカトリックの組織神学の教授というのは、ほとんど今まで日本人の教授がそれを担当するということはありませんでした。今でもそうではないかと思います。外国の専門学者が来て、カトリックの出来上ったドグマ（教理）、ドグマという言葉は、近頃は悪いニュアンスをもつ言葉、独断と偏見などということが言われ、その悪い意味の「独断」と訳されますが、そういう悪い意味は元来はないわけです。そのドグマつまり教会できめた教えですね、これを教える、またその理解のしかたについて教える、それが組織神学の教育なんですね。それはちょうど、法学部で六法全書を覚えさせ、それをどう理解し、それをどう適用するかということを教える、そういうやり方に近いんです。出来上った形を教育するということになるわけであります。ところがですね。プロテスタントの場合、そのプロテスタントの中でもとくにわれわれのキリスト教の伝統では、それは広い意味で改革派、リフォームドという系統に入ると言ってもいいんですが、リフォームドの伝統は、そういう出来上った形を覚えさせるというやり方をしないのですね。例えば、わたしは組織神学のクラスにおいて出来上った形がどうして出来るかという、そこを教えようとするわけです。これはリフォームドの伝統におけるプロテスタントの行き方の一つの特徴でもあるわけです。出来上った形、これはラテン語で、フォルマ・フォルマータとでも申しましょうか、「フォームド・フォーム」、「形づくられた形」というものを教えるということが、もしも、ローマ・カトリック的な行き方だとするならば、作り出す形「フォルマ・フォルマンス」「作り

出していく、形成する形」、そういうものを教えるということ、これが教育の課題だという風に言っていいと思うのですね。ビルドゥングという言葉の中にも、そういう含蓄があるわけであります。もしも、これが神学の例でありますから分りにくいとするならば、もう少し一般的に日本の教育の課題を示すために、音楽の例を引いてみようと思います。

私は、ここに一つの切り抜きを持って参りました。これは、一九八五年の十一月二十六日の朝日新聞に出たものでありますが、ピアニストの園田高弘という人が書いたものです。この人が第十一回ショパン・コンクール、これはテレビなどにも報道されたものでありますが、このショパン・コンクールの模様について書いたものであります。このショパン・コンクールで、日本人がどういうものとして見られているか、ということについて書いたものであります。今回日本人はたいへんたくさん予選に通って、まるでこれは日本人のためのショパン・コンクールみたいだという印象を与えるほどであったと、多くの人々にはたいへん驚きであったようであります。各国審査員は、口々に日本大勝利とか言い、翌日の新聞には「日本人によるショパン・コンクール」という記事が、大々的に出たほどだと書いてあります。ところが第二次予選以後のことについてこう書いてあります。これは、おそらく皆さんの予想のつくようなことでありますが、実際には日本人の演奏が、やはりいろんな意味で問題になったというのです。ショパンは、ご承知のようにポーランド出身でありますから、これは、ポーランドのワルシャワで行われたコンクールでありますが、ポーランド人のショパン演奏というものがどういうものであるか、ということも書いてありました。このことについて、園田高弘は結論的にこういうことを言うわけですね。「ポーランド周辺の国々、そして、西側の諸国の参加者は、さすがにショパンについて的を得た演奏をする。しかるに、日本人のショパンは、相対的に作品に対する切り込みが浅く、日本的美意識のみによって表面的に流れる。」　そして「今回、日本人はこれまでにない高い水準に達しただ

けで、これから乗り越えなければならない課題は、日本人音楽家の芸術的表現にとっていよいよ難しいものになるであろう。それであればこそ、真の若い芸術家の出現を願う切なる気持を抱いてワルシャワを後にした。」と、こういう風に、このピアニストは書いておるのであります。この園田高弘は、日本の音楽家は、技術的には相当のレベルにいっているけれども、この人の言葉で言うと、「切り込みが足りない」と言うのですね。切り込みの浅さということを指摘し、それを乗り越えなければならないということであります。それは、私が、さきに申しましたことを当てはめてみるならば、音楽というものも、出来上った形というもの、つまり楽譜に書き表わされた形があるわけでありますが、そういう、フォルマ・フォルマータをただ演奏という形で音にして出すということだけでは駄目で、「切り込み」つまり、その、フォルマ・フォルマンス、それを作り出すようなものに触れなければならない、ということを言っていると思うのですね。

日本にも、小沢征爾のような本当に優れた音楽家がおりますし、これを育てた斉藤秀雄という立派な教育者もおります。斉藤秀雄という人は、斉藤秀三郎という人、冨士見町教会で植村正久牧師の指導を受けた英語学者の斉藤秀三郎、その息子でありますから、この斉藤秀雄の指導の背後にも、やはり、何らかキリスト教的な背景を見ることができるわけでありますが、桐朋の教育もなかなか大したもんだと思うんですね。重要な課題というのは、園田高弘氏によれば、「切り込み」ということなんですね。これを、どう教育するか、ということであります。

「演奏」が、外国では「解釈」という言葉であるということは、最近は、日本で相当に知られるようになってまいりました。「解釈」――楽譜を解釈するということでありますね。あの筑波万博で、ロボットによって楽譜を音にするということを、たいへん偉そうにみせびらかすということに対し、ある音楽家は非常な憤慨を感じておられました。ああいうことをやるから駄目なんだと。楽譜をただ音に直すということだけでは駄目なんだということを言っておら

れましたが、「解釈」ということになりますと、出来上った形を、もちろんそれを媒介として入らなければなりませんが、本当は、フォルマ・フォルマンス、それを作り出すような次元に切り込み、そして、その音楽を生み出すような創造性の次元に触れ合うということなしに本当の解釈ということは出来ないと思うのですね。音楽の場合もまた神学の場合も同じようなことを問題にしているのであります。

本当の教育というのは、そういう点ではフォルマ・フォルマータを受け入れるということ、それを与えると、例えば、受験勉強のような仕方で与えるということであり得ません。形成力というようなものに触れさせるというようなことが、重要ではないか、これは言うまでもないことであります。わたしは、昔、陸軍幼年学校というところに中学の年令の頃行っておりました。そこでの教育というのは、英語で言うとコンフォーミズムの教育なんです。このフォームの中に押し込むのですね。ですから、形だけは出来上るんですね。私は、その形というものに押し込められた経験がありますから、日本の教育というものは、どうもその辺に共通の問題があるんじゃないかということを、感じさせられておるわけであります。勿論、その形を近頃みたいに破るということが、つまり、デフォームといいますか、これがいいわけでもありません。しかし、コンフォーミズムであってはならない、その形成力に触れさせるということが重要だと思うわけではあります。

日本の考え方は、ですね。昔から、いろんなことを学ぶとしても、お稽古と言うのですね。稽古というのは、これは、ここでは国文の先生もおられますが、稽という字は、物事を考えるということですね、あるいは、それに止まるとか、それに至るとか、比べるとか、それに一致するとかいった含蓄をもった言葉であります。お稽古、これは歴史的な古いものを考える、古いものに従う、古いものと一致するというような仕方で学ぶこと、それがお稽古なんですね。日本はこのフォームというものから入って、形に、型にはめるということが教育の基本であり、これは、茶道で

あっても、華道であっても、剣道であっても、柔道をやっても、今や、スキー、スケート、みんな型から入るんですね。これは非常に日本的なやり方だと思います。

しかし本当の教育は、型を否定するのではないが、むしろ型を形成するような次元に、園田高弘が言うところの「切り込み」がある、ということではないかと思うのです。問題は、その「切り込み」という課題をもって、わたしたちはほんとうにどうするかということであります。私は、この園田高弘氏の書いたものを新聞で見て、いろいろな感想がよみがえってまいりました。というのは、私がニューヨークにいて、留学をしておりました頃、カーネギーホールにこの人がやって来たのですね。そして、日本人の演奏会だというので、わたしたちはジャパン・ソサエティから安いキップをもらって、席を埋めるためだと思いましたが、出かけて行き、この人のピアノを聞いたんです。次の日のニューヨーク・タイムスに批評が出ていたのですけれども、「現代物はいいけれども……」と書いてありました。ところがですね。批評が、まさに、この園田高弘氏が今の若い者に言ってることと同じことを言われていたんです。それで、まあ、たいへん面白いと思って、これをこのように切り抜いておいたんです。ということは、その時以来、日本人は問題はわかっている、指摘されている、しかし、それをどうするかということ、これがなかなか難しい問題なのだということであります。

日本における教育というのは、なかなか難しい課題をもっています。西洋の場合と違いまして、西洋的なものを受け入れ、そして教えるという、そういう要素があるわけであります。しかし、一体、わたしたちの教育の目標というのは、一体何でしょう。こういうことを、今や、昔と違いまして、本格的に考えるべき時代がやって来ました。中教審でやっていることは、まあ、園田氏のいう「切り込み」が足りないんではないでしょうか。だから本当の意味での日本の教育問題と取り組むような改革というようなものを生み出すまでには、なかなかならないのではないかと思う

のであります。先程申しましたように、日本において教育という課題は、非常にむつかしい、日本人が教育に熱心であるということは、外国でも有名な事実でありまして、そのテクニックだけは、たいへんなものになってきていて外国人もまたそれを学ぼうとするほど、進んだものになっているわけでありますが、それにもかかわらず日本における教育の課題というのは、なかなか難しいと言わざるを得ません。

根本的には、日本はどこに行くのか、どこにもって行くのかという問題、これが教育者の課題になるということを申しましたが、そのために、日本をある意味で、教育の観点からトータルに、ラディカルに、十五年前の大学紛争ではトータルとかラディカルという言葉がその頃大学生の用語でありましたが、これは、実は、神学的な発想をいう言葉なのですね。神学的な発想というのは、トータル、ラディカルということなのですが、わたしは、キリスト教教育が日本においてどういう使命を持つかということを考えた場合に、日本を、トータル、ラディカルに捕えるということにおいて考えねばならないと思うのであります。キリスト教教育のみならず、わたしは、教育というものは、そういうものでなければならないという風に考えておるのでありまして、日本の場合には、政府主導型でやってまいりましたので、そういう考え方は、教育者というのは、昔から国家によって、ある場合には国家によってお金も支給されて、国家のために働く者として育てられ、それが教育者の弱さになったのですね、だから、トータル、ラディカルに考えられない、それが萎縮してしまった、ということだと思うわけであります。

最近の日本の状態というのは、こういう問題をどうしても考えなくてはならなくなってきた、ということができると思います。一方ではたしかにそういう問題が感じられてきてはおりますが、しかし日本の文化人も含めて教育担当者は、そういうことに取り組むほどには、何といいますか体が育っていない、教育者の主体が強力になっておりませんから、まあ、自分の専門だけでやっているんだとか、それが大学だとか、逃げているわけですね。そういう教育の

大きな課題がわたしたちにはあるんだ、文化的な課題があるんだということは、あまり自覚されていないのではないかと思うのであります。

私は、この正月、テレビを見ていて、いろいろな感想があるのですが、あれは、「不思議な大国日本」という題の、NHKの番組だったんではないかと思います。そこに、山崎正和という大阪大学の劇作家でもある教授が登場しておった番組がありました。実は、山崎正和という人は、私が昔、中央公論に書いたものを読売新聞の論壇に紹介論評をしたことがありました。それ以後この人はたいへん有名になった人であります。山崎正和という人の名前を、それ以来私の頭にはあったんですね。ところが、その人の話を聞いて、まあ、ある意味で失望いたしました。近頃日本でテレビなどで発言するようになる有名人のレベルを示しているのかも知れませんが、がっかりいたしましたわけであります。この人は、つまり、こんなことを言っておりました。

日本は、キリシタンつまりカトリック・キリスト教が入ってまいりましたのは日本の戦国時代、織田信長から徳川幕府の初期ですね、日本はキリスト教を受け入れないで、西洋の生活様式を受け入れようとした。ところが東南アジアなどは、キリスト教を受け入れて、西洋的な生活様式を受入れなかった、というのですね。それは、日本には日本的な魂があるので、キリスト教を受けいれないというらしいのであります。その考え方の背後に、和魂洋才的なものがある、和魂洋才的な考え方が、再び力を持ち出したということを、示すような発言でありました。確かに、日本はカトリックの伝道を受入れなかったということも、山崎氏が言うように事実でありますけれども、カトリックを受入れないということに関して山崎氏は中曽根首相と同じようなことを言っているのですね。多神教的で、それで寛容だと言うんです。この人は、宗教的な問題ということを、十分捉える力がないのかも知れませんが、多神教であっても、一神教であっても、それは、信ずるという形態においては似ています。だから、多神教を固執することになると、つ

まり一神教を固執することに対して競合、競争関係となると、一方が力をもっていれば、非常にブルータルなことになるのですね。非寛容になります。日本人は寛容であるというのは、これは日本人が自己反省がないために、自ら作り上げた自己神話であって、日本人が非常にブルータルで、世界に類を見ないほど迫害をやったというのが、キリシタン迫害なんですね。それが今度の戦争にも出た、それは大変なことをやったんです。それを、忘れている。この山崎さんは、そういうことを抜きにして、日本人は、如何に寛容であり、そして日本人の魂をもって、西洋の技術を受入れることがいいのだということを、今また、主張しだすのであります。山崎さんの話は、そのくらいにいたします。

中央公論社は依然として、私に、中央公論を毎月送ってくるのですが、この中央公論の百年記念に、梅原猛という人、これも有名な人でありますが、この梅原氏が書いた論文を、たいへん面白く読みました。この梅原猛の論文『甦る縄文』という論文を手がかりとして、私の今日のお話しの中心にはいってみようと思うわけであります。この梅原さんという人は、私はお会いしたことはないのですが、私などより、ちょっと年上の世代の人ですが、なかなかイマジネーションのある人ですね。むかしこの人の法隆寺論を読んでたいへん面白いと思ったことがありました。

さて、この人は、縄文時代、縄文文化、そのあとに弥生式土器の文化、弥生文化と来て、この弥生文化の末期にですね、いわゆる聖徳太子から始まる日本の、いわゆる国家形成なるものが始まるわけですね。この人は、たいへん興味深いことに、日本は二つの国家がある、それは、聖徳太子によって始められる律令国家、これは六〇一年、紀元で言うと七世紀ですね。先程、日本人は寛容であるということが神話だと言いましたが、日本人は、シンガポールに昭南神社をたてたり韓国でも同じような神社を建てて、むりやり礼拝させた、そういうことをした国でもあるんだ、ということをわたしたちは忘れてはなりませんが、そういう国家の起源ですね。日本は古い国だというのも神話でありますね。実は、日本は国家としては七世紀から始まっているということを、知らなければなりません。新しいんです

ね。非常に新しい。ヨーロッパの歴史とてらしてもこれは新しい国なんですね。七世紀から日本は始まるのですが、しかしこの梅原さんは、（日本にはその七世紀から実は天皇体制の国家ができるわけです）天皇制なるものを中心とした新しい日本の前に、長い長い、縄文文化の日本というものがある、というのですね。そして、日本の国から発見された土器、縄文時代のものは、今、世界で発見されているものの中では最も古い、一万二千年前のものだというのです。そんな古いものが日本にですね。もちろん、他からもそれ以上古いものが発見されるかも知れません、しかし、現時点では、世界で一番古い縄文土器が、日本から発見されているというわけです。新しい天皇体制、今日わたしたちはそこからなかなか抜けきれないでいる、この前の敗戦によっても、十分、そこから脱脚できないで来た今の日本のあり方、七世紀しか続いていない今の日本から抜けきれないでいるんですが、それよりも、もっともっと古い縄文時代の日本というものが日本列島の底にある、彼は、そこに目を止めたんですね。そして「甦る縄文」というのは、その縄文時代というものを、もう一度発見しないといけないというわけです。

これはたいへん面白い。なぜ面白いかと言うと、私は、これを読んですぐ、お隣りの国際基督教大学に参りました。というのは、三鷹市大沢には東京神学大学、国際基督教大学、隣り合わせにあるのですが、私どもの三鷹市大沢三の十の三十が東京神学大学、三の十の十が国際基督教大学であります。この国際基督教大学は、実は、縄文土器のたいへんすばらしい発掘の場所なのです。国際基督教大学のキダーというアメリカ人の教授がおられますが、キダー先生は、考古学者であります。あそこに、国分寺の方から流れてくる野川という川があります。今は、野川公園となっています。この野川という川の周辺を大沢と言うのです。そこは本当にすばらしい清水が湧き出しておった所なのです。そこに縄文時代の人々の住んでいた遺跡がたくさん出てくるわけです。そして、国際基督教大学のキャンパスの中にも、その縄文式時代の竪穴式の居住住宅の跡が見つかっています。それが、今発掘されたまま保存されています。そ

してそこから発掘されたすばらしい縄文式土器は、今、ＩＣＵのミュージアムに陳列されている。そこで私は、そこに急いで行って、梅原さんの言うのを読んでですね、自分が立っている場所を再発見したような気がいたしました。それは、この三鷹市大沢、その土の下に縄文時代の日本人の住んでおった、その場所の上に、今、わたしは立っておるのだという、そういう感じを持ったのであります。

この梅原さんが、何故、縄文文化に興味をもったか。それは、日本の、日本人の基盤というものが、何か、日本の文化の基層、基になる層というのは一体何かという、それを捉えようとしたからです。

日本人は何か、という問題。日本文化は何か、という問題ですね。それを、聖徳太子あたりの新しいところから始めないでですね、これがたいへん面白いと思われるのであります。なぜそれが面白いかというと、先程申しましたように、トータル、ラディカルな仕方で日本文化の問題を考える時に、それは根源にまで溯ってみるということを媒介としなければならないからです。そこまで溯ってみて、そこから全体を考えてみると、日本というのは、昔、紀元二千六百年だと言っていた（あれはインチキでしたが）けれども、そういうのとは違いますが、日本には縄文時代という古い古い基盤があるのですね。梅原さんは、それではどういう風に縄文時代を読むかという問題にぶつかる、その縄文時代を読む時にこの先生は縄文時代からの、いわば日本国における先住民族、それがアイヌですね、縄文時代の文化がアイヌ文化の中に存続しているというそういう見方をとるわけです。このアイヌ文化を媒介として、縄文時代の日本を読もうとしたのですね。これが「甦る縄文」、この人が書いた縄文時代の研究論文のテーマなのであります。これは「法隆寺論」などより、はるかに面白い。「柿本人麻呂論」などよりも、はるかにスケールの大きなものですね。日本を、トータル、ラディカルに捉えようとしたわけであります。この縄文時代の日本人というのは、自然の中にある賜物、これを狩猟・採集するというしかたで生きておった、そういう人間であるわけです。これを狩猟採集文化と

名付けたのですね。ところがこの縄文時代の日本の末期に南九州からやって来る強力な武器を持った農耕民がいる、これが今の大和民族というのでしょうね。わたしたちはその末裔に当たる。この梅原さんという人はお母さんが東北仙台の出身、自分の血の中に、縄文時代の人間の血が流れている、その自分のルーツを発見するという、そういうことでもあるわけですね。そして天皇体制というものがあとに入って来て、そしてこれが、縄文時代の先住民族を北に南に駆逐するわけであります。北に、それがアイヌ、南がクマソにたるわけですね。あるいは、隼人になったというわけで、辺境の地にアイヌの北海道とか、東北とか、あるいは沖縄、こういう所に、むしろ、縄文時代の文化の残ったものがあり、それを用いて縄文時代の古い日本、日本文化の基礎としての日本を捉える、そういう方法をとったわけであります。

これは、たいへん面白いやり方だと思いますが、しかし、梅原さんが辿って行った結論、これが、わたしには賛成できないのですね。梅原さんが、そこから引き出された見方というのは何かというと、日本人の魂というのは、縄文時代に基礎をもっていると。それは、遠藤周作が「日本の精神的な基盤は田んぼだ」などというよりはもっともっとスケールの大きい面白い考え方ですね。縄文時代に基礎をもっているというのであり、そしてそれから大陸文化が入ってくる、弥生式文化、それで、「縄魂」という、それは和魂洋才ではなくもっと根本的に「縄魂弥才」、弥生の才、つまり大陸の才能ですね。才能というよりも大陸の技術、知恵、知識、こういうものだと言うのですね。

ところでこの人は、縄文時代の基本的なものは、一種独特な宗教ですが、それが祖先崇拝に現れ出ているという見方を提示いたします。それはわたしにはあまり根拠がないのではないかと思われるのですが、仏教は弥生式時代末期から入るわけですね。これは六世紀半に入ってきます。そして天皇中心体制というのは、大化の改新からですね。中大兄皇子のクーデター以後なんですね。まあ、いずれにせよ仏教というのは元来ですよ、お葬式などに全然興味がな

い宗教なはずです。それが、葬式仏教になったので、日本に土着できたんだという、そういう解釈なんですね。キリスト教も、葬式キリスト教になると、日本に土着できるみたいなことになるのかも知れませんが。いずれにせよ、梅原さんは、そういうような仕方で、結局、中曽根流のいわゆる「和魂洋才」型の考え方に、日本の古い底にある縄文文化を見ながら戻ろうとしているんですね。縄文文化の基礎に触れながら、そこに戻ろうとしているわけであります。

しかし、私は、縄文文化という日本にはもっと古い基盤があるんだということをトータル・ラディカルな見方をもってそれを見ながら、そうして、今の日本の生き方というのはむしろ新しいものだという、そういう仕方で、相対化をしながら、教育の問題を考えてみて、キリスト教的な教育というのは、一体どういうことなのか、ということを問うときですね、その根底、基礎において考えるのがいいのではないか、と思うわけであります。そこで、この梅原さんがアイヌの文化というもので縄文文化を読む一つの例としてあげたものを、むしろこう見るべきではないかと思うのであります。

わたしは、それにたいへん興味を持ったのですが、梅原さんは、二つの例をあげています。

一つは、神道、神社で用いる御幣。ご存知でしょうね。あの紙をぶら下げたものですね。あれは、アイヌの「イナウ」と同じだと言っております。

もう一つは、折口信夫という民族学者が取り上げた「マレビト」、これはお客さん、客人でありますが。このマレビト、これは日本の独特な考え方だということでありましょうが、それは、アイヌの「マラプト」と言われるものと非常に近いですね。アイヌにおいて、「マラプト」と言われるものは、何よりもまず「熊」「カムイ」です。アイヌにとって、熊というのは、特別な意味を持っている動物でありますね。

「『熊』は、天のかなたから、土産を持って人間の世界にやって来たマラプト、即ち、客人である。彼は、天の世界

では人間と同じような格好をして、人間と同じような社会生活を営んでいる。しかし、彼は、この地上の人間の世界に現れたとき、熊という仮装を、仮面を被っていた。」

というのですね。何のためにか。

「それは、自分のおいしい身を、土産として人間に与えるためである。それ故に、そのマラプトの意志に従って、人間は熊の子どもを捕えたら客人として手厚くもてなし、それを無事成長させねばならない。しかし熊が成長して、その肉が最も美味しい時期になったとき、人間はそのマラプトの意志に従って熊を殺して、その身を食べねばならない。かくして、マラプトは殺される。それはマラプト自身の意志であったのである。その土産を受け取るかわりに、人間は一つの務めを果さなくてはならない。それは、熊の魂を天に送ることである。この熊祭りの行事を『イヨマンテ』と言う。即ち、『それを送る』という意味である。この祭りの主旨は、熊を殺し、熊を食うことではなく、熊の魂を無事に天国に送ることにあるのである。そのために前もって先に言ったヌサが作られ、それにイナウ（御幣ですね）が並べられ、その前に穀物や酒が供えられるのである。熊の霊は、この『イナウ』即ち、鳥に乗って、魚や穀物や酒とともに、天に帰る。こうして天に帰った熊の魂は、仲間を集めて、人間に土産としてもらった魚や穀物や酒でもって宴会を開くのである。そして熊は、いかに人間に大事に扱われ、いかに無事にこの天に送られたかを仲間に語るであろう。すると、熊たちが、その帰ってきた熊のように、私も人間界に行きたいと思う。そこで来年は、どっさり熊が捕れる、というわけである」。

これが、「マラプト」と呼ばれるアイヌの言葉と関係があると見ます。それから「イヨマンテ」という熊祭りの意味をさぐるのですね。梅原さんは、マラプト（客人）が天からやって来る、そして、その肉を人間に食べさせる、人間は、それで養われて熊の魂を天に戻す。天に戻すと、人間というものは非常にすばらしい、お客さんの扱い方が非常

にすばらしいものだから、またやって来る、そのようにして地上と天上との交通が起こる、これが先祖崇拝の中に残っているんだということへと、展開していくのですね。しかし、この結論は梅原さんのイマジネーションでありましょう。

そこで、わたしもイマジネーションを持って、これを読んでみるとですね、これは、キリスト教だからそういうイマジネーションを持つと言われるかも知れませんが、このマラプトの話というのは、これは基督者にとってはイマジネーションを刺戟される話なのですね。つまり、日本の縄文時代の人間というのは、思いの外、広く行動をしておったようでありまして、日本が島国であるということは、昔から、わかっておったらしいんですね。それは、物を取って生活しますから、相当大きな距離を動かねばならないからかも知れません。島国の中に育つ人間というのは、海に囲まれていて、何か外からやって来るということに対して、非常にナイーブなんですね。そして、歓迎的なんです。それで、海からやって来るというのは、天からやって来るというのと同じですね。海の向うからやって来る、そのお客さんを大事にする。そしてお客さんは、何か良い物を持って来て、それを与える。そして、こちらはお客さんを大事にして、その人を天に戻す……、そういうことになるわけでありますね。ところが、元来そういう魂を持っておる縄文時代の日本人は、外からやって来る者に対して、自己を守るということがうまく出来なかったと思いますね。

そこに、南九州から天皇中心の農耕民族がやって来る。農耕時代になると、富の蓄積があり、国家が作られ、そして貧富の差が激しくなるということなのですが、その天皇一族がやって来て、そして武器を持っている。ところが縄文時代の人間は、のどかな生活をしておるので、かなわないのですね。これは、あのインカ帝国の滅亡に似ています。インカ帝国ものどかな生活をしていて、外から来るものに何かいいものがあると考えている、そこにスペイン人がやって来た。しかしスペイン人は、それを滅そうとするのですね。日本の場合、原住民としての昔からの日本人は、新し

く南から入って来た農耕民族、武力をもった農耕民族に征服されるということなんですね。

わたしは、それを読んでおりまして、ユング的な日本人の魂の深層構造の解釈みたいになるかも知れませんが、日本人は外からやって来るものに対して、一方でこれを歓迎するという考え方がありますが、それで入ってきて、そして武器を持って入って来た者に征服されたということから、他方、何といいますか、警戒心も出てきた。そういうわけで深層において心に傷を持った魂ということができるのではないか。元来開放的なんですね。その開放性を逆用されて、占領される。それに対して、閉鎖的になる。それが日本人の魂の中の開放性と閉鎖性という、魂の傷みたいなものになったのではないかと。これはもちろん、イマジネーションです。梅原さんと同じ前提における別なイマジネーションでありますが、そういうようなものが、日本の中にはあるのではないかとわたしは思うのです。日本人の中には、何か外から、天からやって来るものに対して、それを迎える、マラプト、客人を迎えるというあり方がある、それが基本的なものなのですね。何かを待望して、何か待ち受けて、こちらから出かけて行くということではなく、待ち受けている人ですね、そういうようなものが、日本の中にあるということではないかと思います。

わたしは、さき程皆さんにさし上げましたこの『形成』の中に、日本の魂には、そういう二重構造がある、そこではポラリテートという言葉で書いておきましたが、日本人の魂の中に、両極性（ポラリテート）というものがあるということをのべました。そもそも日本は島国であるので、ものが外から入って来る、外から入って来るものが、日本に蓄積され、日本はたまり場のようになるということですね。日本は西洋文化から遠いだけではなく、インドからも、中国からも遠い、韓国よりも遠い所にありましたから、いわば世界の末端にあるわけですが、そういうことから、日本には、外から入って来るものがたまる、そしてその外から入ったものは、内にあるものと、いつでも緊張を引き起こすようなものになる、それが魂の中にあるポラリテートをつくり出すのであります。そして、そのポラリテートが、最初にはっきり現

れたのは、欽明天皇の十三年、五五二年、六世紀に、仏教が伝来したとき以後だということを、そこに書いたわけであります。蘇我稲目（イナメ）は仏教を擁護いたしまして、これは西蕃諸国が皆礼拝している仏教を、日本が受け入れないことがあろうかと、積極的に支持をする。ところが物部尾輿（オコシ）はこれに反対する。あだし神を礼拝すれば、国つ神の怒りをかうであろう、と。蘇我、物部の両家の、英国で言うとバラ戦争みたいなものであるかも知れません、この争いで蘇我家が勝利を得る。こうして仏教導入となるのですね。そして、この蘇我体制が破れるのが、中大兄皇子のあの大化改新のクーデター。近代的な天皇体制の確立ということになってくるわけであります。

こういう相剋は、この梅原さんに言わせれば、もっと古い縄文時代と弥生時代、この間に起っているというふうに考えられるでしょう。しかしいずれにせよ、日本の魂の中には、何か、縄魂弥才あるいは、和魂漢才という風に言う、そういうポラリティー、両極性というものが、絶えずあるのであります。そこでわたしたちは、近代日本においては、いわゆる和魂洋才の時代に生きてきて、そして戦後四十年を経て、この日本文化の繁栄をもって、またもや、和魂洋才で行こうとしているのが、今日の日本の一般的な傾向、中曽根さんを政治的な頂点とする、一般的な傾向だという風に、言うことが出来るのではないでしょうか。

しかし、わたしは、日本が今日直面している問題は、和魂洋才的なものに戻ることで日本文化の問題が解決できるかという問題であると思います。日本はかつて和魂洋才の行き方に自信を持った時代がありました。近代日本は軍事力が強大化して、和魂洋才でやって行く、やれる、日本精神でやるんだ、そして武器、その他は外国から取り入れたが、精神は大和魂でやるということでした。だから戦争が負けた時も、日本は、物量には負けたけれども、精神的には負けなかった、そういう考えでした。それで四十年経って、この平和と繁栄の中で、ひそかに、またあらわに、その意識が出て来ているわけでありますが、わたしは、日本がこの時代において新しい仕方で何処に行くかという問題

に取り組むときには、再び頭をもたげて来た和魂洋才ということの中にある日本精神の根本問題をよく考えなければならないと思うのであります。そして、日本社会にキリスト教教育なるものがあるということは、まさに、その問題と本格的に取り組むということでなければならないであろうということなのであります。

さきにおくばり致しましたＩＣＵでの講演、それはＩＣＵの学生のために話をしたものですが、そこでひとつの経験を例として取り上げました。昨年スイスのバーゼルにいたとき、そこで会ったある日本の作曲の学生との会話であります。このバーゼルというのは、日本ではあまり知られないのでありますが、スイスでは、バーゼル大学というのは一番古い大学であり、バーゼルはまた、音楽の一つの中心でもあるんですね。バーゼルにある音楽学校というのは、なかなか有名な学校で、いい学校であります。例えば、パイプオルガンの演奏者で、日本にときどき来たこともあるコルゼンパという人がおります。この人はバーゼルの音楽学校のオルガンの教授であります。このバーゼルに大阪から来た一人の留学生がいました。この人は、大阪大学で、理科系統の勉強をした人、そして昔から音楽が好きだったんでしょうか、転向して、作曲を専攻することになりました。それで、大阪芸術大学でしたか、大阪に二つの音楽関係の有名な学校がありますが、どちらかの学校で学んでいた人でありますが将来、そこの教師になるように嘱望されて、バーゼルに留学生として、来ておりました。そして、作曲の勉強をしていたわけでありますが、この今お話をいたしましたコルゼンパの演奏会を聞いた帰り、この作曲の学生とわたしは、ある町角のカフェに入って、話をしたのであります。この人は、言ってみると典型的な和魂洋才型の音楽の留学生。それはそのはずで、この人はお父さんが神主なのです。しかし、教育はみな西洋的であります。しかも作曲なんですね。作曲というのは、これは、私は外国に学びに行くものでも一番難しい課題ではないかなと思います。作曲を学ぶということ、それは昔山田耕筰とか、滝廉太郎とか、そういう有名な作曲家が留学をいたしましたけれども、現代において、作曲で留学するのは難しい勉強

だと思います。演奏関係のものならば、まあまあ立派にやってゆけるわけであります。この人は、また、非常に作曲が遅い人で、たいへん苦労しておったようでありますが、このカフェでの話は面白い。この人は、「いつまでもここにいると危ない」と言うんですね。それである程度ここで作曲の技術を学んだら、日本に帰って日本の魂をもって作曲をやると言うんですね。わたしは、その人と話をしたことをこの『形成』の十二ページにも書いておいたのですが、わたしはこの作曲の学生にこういうことを言ったのです。

これから、もしも新しい日本の文化の形成ということがあり得るとするならば、和魂洋才というやり方で、はたして出来るでしょうか。今まで、そういういき方でやって来たということはわたしたちは知っているけれども、これからは、先程園田高弘が言うような「切り込み」の問題ですが、本当に新しい個性的な、日本の、しかも世界的な文化というものを作り出そうとするならば、それは和魂洋才というしかたで、はたしてできるかどうか。それで、わたしはこう言ったのです。日本人は、もっと魂を守ろうとするのではなくて、危険にさらすことがなければならないのではないか。日本人は、昔から欧化主義と国粋主義というような仕方で、それは実は魂の中にあるポラリティーを文化的なポラリティーとして表現したものですが、いつでも相剋し合ってきたのですね。しかし、それをこれからの日本は解決しなければならないのではないかと思うと。

何故、魂を危険にさらすことが出来ないか。それは、先程の話ですが、もしもマラプトとの良い関係、本当に天からやって来たものが、人間にとって祝福であるようなものに触れたら、日本は、魂を危険にさらすということができると思うのですね。ところが、占領されてしまう。つまり生かされないで殺されるということであるならば、日本人は、自分の魂を守ろうとするようになる。どういうものによって触れられるかということが、大きな問題であったと思うのですが、日本が新しい意味で文化形成力をもつとするならば、それは、魂を危険にさらし、危険を恐れず、魂

の中に大きな転換をもつということだと思うのであります。

わたしはその若い作曲家に申しました。和魂洋才は結局虚弱なる精神ではないかと。だから日本人は、一般社会に出て行きますと、人見知りということをよく言われますけれども、何となく、精神的に弱いのですね。今日、わたしたちの日本の魂が、そういう伝統的なポラリティーというものを克服して、新しい行き方へと行こうとするならば、魂を単に閉鎖して守ろうというのではなくて、それを危険にさらして、弁証法的に言えばテーゼ・アンチテーゼというテーゼをアンチテーゼを排除してテーゼを守るということではなくて、これは弱い精神です、強い精神というのは、アンチテーゼを取り入れて、そのテーゼ自体がより高いものに上るということ、つまり、テーゼとアンチテーゼからジュンテーゼへと上るということですね。そのために魂を危険にさらすというようなことをあえてしなければならないのであります。こういうことが、わたしたちにとって、日本の今後の文化形成力を生み出すような精神を生み出す精神の課題、それをわたしは、しばしば日本の精神的な課題と言ってきたわけでありますが、それは、この日本が伝統的に持っておった魂の中にあるポラリティーを克服することなのであります。これ程日本が世界的に役割を果さなくてはならなくなってきた時に、何か、昔の天皇の陸海軍が、今姿を変えて、日本の商社マンとして、突進して行くというようなものであってはならない、新しい仕方で、魂が大きく育つとするならば、それは、テーゼ・アンチテーゼのアンチテーゼを中に含んで、より高い所つまりジュンテーゼに上がるという精神の内面の成長、発展ということでなければならないと思うのですね。

日本にキリスト教教育があるということは、わたしは、この残されている課題と、取り組むためだと考えております。日本の教育の問題は、文部省や臨教審では、このような教育の根本次元に切り込まれておらず、昔風のやり方をとり戻す方向でやれるという風に考えているところにあるのではないですか。そういうことで、たとえば外国に日本

を紹介するため持ち出すのは、生花とか柔道とか、異国情緒に訴える非常に日本的なるものだけなんですね。それは、しばらくの間は、もの珍しいからいい。しかし今や、そんな幼稚な段階ではないはずです。国際交流基金というのをご存知でしょうね。あの国際交流基金というようなところへ参りますと、一番優先は、柔道とか華道とか、そういうものの講師派遣ですよ。それが文化交流だと思っている。そういう時代は、もう急速に過ぎているはずです。そうしますと、日本の中にあるそういう精神的な課題、精神的なわたしはあえて宿題と言うのですが、この宿題と、真っ向から取り組むような教育が与えられなければならないし、その教育の課題というものが、もしも、何によってよく担われるかとするならば、私は、これはキリスト教教育だと思っています。

それは、単に国際性の強調ということだけでもないと思います。古屋先生の言われたことを前提としてそれを深めねばならない、それをどうするか、それは何か、というと、新しい国際性を作り出すということは、日本の魂の変革の問題だ、このことを抜きにして出来るはずはない、それは魂にまで及ぶ国際性の教育だと思うのであります。しかし和魂洋才では駄目だと言うことは、神学者大木英夫だけが言っているのではないのですね。科学者の中にも、その辺を洞察している人がいまして、江崎玲緒奈という人をご存知でしょうがある雑誌に同じことを書いていましたね。私は、キリスト教的な言い方ですが「アーメン」（まことにそのとおり）と言いたくなりました。しかし、今の政治指導者、それから先程上げた山崎正和さん、そういう文化の指導者を任じている人は、昔、わたしたちを一種日本主義へと導いて行った戦前の指導者と同調異曲、これではだめではないかと思う。日本がそういう指導に服していてはならないと思う。だからあえて私は聖学院ファミリーの中でそのことをはっきり申し上げてみたいのであります。

これは、日本の教育が、今まで、政府の飼い猫のような状態だった、飼い殺しになっていたと言うと、言い過ぎかも知れませんが、昔の師範学校とかは、そういう性格を持っていたのですね。私も、戦後、東京高等師範という所に、

二年位行くんです。それから東京神学大学に行くんですが、これは今の筑波大学の前身ですが、東京高等師範などは、日本の中等教育を支配しておりました。今でもそれがありますね。茗渓会という団体がありますが、相当な力をもっています。しかし、それは教育の問題について、ここに申したような切り込みがないのですね。わたしは、その当時、文理大の学長であった務台理作先生に哲学の手ほどきを受けました。そのことを非常に感謝をしております。しかし、務台先生が私に教えた哲学の根本的なものは何かと言うと、ヘーゲルの弁証法で、テーゼ・アンチテーゼ・ジュンテーゼ、なのです。これを具体的に、どういう風に教えたか。務台先生は、仏教背景の方でありドイツ留学をした先生ですが、テーゼ・アンチテーゼ・ジュンテーゼはキリスト教の教理から出て来る、キリストの「生と死とよみがえり」、これがこの弁証法という論理に現れ出ている、と言われたんですね。務台先生から、ヘーゲルの『エンチクロペディ』の「小論理学」の演習に出て、そのことを教えられました。これが、わたしにとりまして、哲学への開眼でありますけれども、弁証法が分かったこと、また神学への関心をもつようになったこともこの務台先生のおかげだといえる面があるのです。

しかし、今の日本の精神的な課題というものにとって、必要なものは何か、と言うと、この、テーゼ・アンチテーゼ・ジュンテーゼを魂の中に持つということ、そしてそれを可能にするのは務台先生の言うとおりで、キリスト教の中にある生と死とよみがえりの力だということであります。山崎さんは、こういうものに触れていないようです。残念ながら梅原さんも、このことに触れておられないのですね。触れてないので、結局は、祖先崇拝というようなところに戻ってしまうでしょうね。

こういうことを考えてみますと、今日の日本の精神がなさなければならない冒険とは、「メタノイヤ」、キリスト教で言う魂を変える、考え方を変えるということです。メタノイヤのノイヤは理性的なるものを意味し、メタとは、メタ

フィジィクスのメタ、つまり理性の向う側、そこでの転向ということです。理性的なるものの彼岸に触れるような転換が起こる、それが非常に重要なことであります。現代は理性をどう使うか、理性が作り出したものをどのような目的に用いるか、という精神的な力が問われている時代でありましょう。これを、キリスト教教育は与える責任を持っているのではないかと思うのです。そしてそのことは、日本の縄文時代の中にひそかにわき上がってきた憧れ、マラプトの到来を求めるような、日本の本当の魂の深みをエデュケーション、引き出すこと、そしてそれに、本当に良きものを与えるということ、そのことによって精神的なるものが強められていくということですね。

啐啄同時という言葉があります。これは、中から啄むことと、外から突っつくこととが同時に起こるということなのですね。これは、雛がイースターの卵のように殻の中で雛が出来上ってくる、そうすると雛が外に出ようと思って中から突っつこうとする。親鳥は外から突く。そのことが同時に起こる。これはですね、教師と学生の良い関係を表す言葉であります。教育学的用語と言っても良いかもしれません。啐啄同時ということ、さきにビルドゥングと言うことでソクラテス的なるものとキリスト教的なるものが、一つにせられると申しましたが、それがテーゼ・アンチテーゼ・ジュンテーゼへと魂を持ち上げてゆくことを意味するものでなければならない、そういう教育作業、それが啐啄同時であります。

それが、また、日本に対するキリスト教教育の関係でもあるのです。日本が下から求めている、あのマラプトを求めている。それに対して、マラプトがやって来る。それは、生かすためです。自分自身を犠牲にするためであります。自分自身を与えるためにやってくる。日本はミッショナリーという犠牲者、献身者によって、訪れられました。この学校は、ミッショナリー・ティーチャーを持っており、ミッショナリーであるクレーラ先生を、プレジデントとして持っています。これは、具体的なシンボルでしょうね。そういうようなものとして、日本の中に、キリスト教教育が

存在しているんだということを、キリスト教教育の中で奉仕しているわたしたちは、この日本社会が微妙な方向に曲ろうとする時点で、もう一度自覚して、わたしたちの生き方を、考えていきたいものだと、思うのであります。

長時間、いささか、まわりくどいところがあったかも知れませんが、ご静聴いただきましたことに対して、感謝を申し上げ、私の話を終りたいと思います。

一九八六年一月十日

第二回教職員研修会基調講演